

◆最優秀賞◆

家族で守った一本の柿の木

新潟市立新潟小学校 四年 高橋 美月

「お宅の柿の木、切ってくれませんか。」

この言葉は、六年前、我が家が新潟に引っ越してきた直後にお隣のおばあさんに言われた言葉です。柿の木は、私達の前に住んでいた人が植えた木でしたが、その方が引っ越した後は、持ち主がいなかったためほったらかしになっていました。柿の葉は散らかりほうだい、その上、実が落ちると道路はぐちぐち。見かねたお隣のおばあさんは、その間、何年もずっとそうじをしていたのだそうです。そんな事じょうを知って、我が家では柿の木を切つてあげようかということになりました。

しかし、家族で話し合った結果、やっぱり柿の木は切らないことにしました。その理由は、柿の木がかわいそうだったからです。我が家の柿は、なんとわずか三十センチの道路わきにへばりつくように生えています。それなのに秋になると二百個以上もの実をつけてくれるのです。こんなにがんばって生きている柿の木をむやみに人間の都合で切ってしまうのはあまりにもひどすぎることになったのです。また、佐渡から引っ越してきた私達家族にとって柿は佐渡を思い出す大好きな木でもありました。お隣のおばあさんには悪いと思いましたが、なるべくめいわくをかけないように道路のそうじをちゃんとしようということになりました。

それ以来、柿もぎは我が家の秋の行事の一つになりました。平日働いている母は、土日が近づくと、「もういいんじゃない。」と、父に何度も言います。けれど、父は、「まだまだ。」と、その度に答えます。私の父は子どものころ、いつも祖父と祖母の柿もぎを手伝っていたそうです。だから、我が家の柿もぎは経験豊富な父がそう司令官です。

当日は、最初に父がきや立を用意します。そして、腕にビニールぶくろを

引っかけて、柿をポイポイと優しく入れていきます。私は、ふくろにいっぱいになった柿を箱につめます。そして、柿のへつとに渋ぬき名人をつけ、渋ぬきをします。父のひけつは、そのときにブランデーを混ぜて風味を出すことです。ふくろにみつぷうして一週間で出来上がりです。柿が出来上がると柿が今までめいわくをかけた隣のおばあさんやご近所さんにおすそ分けをします。ふくろにつめて一軒一軒、母といっしょに回ります。私は、ご近所の皆さんに「今年もおいしい柿ができました。ご家族の皆さんで食べて下さい。」と、心をこめてわたします。すると皆さん、「ありがとう、今年も楽しみにしてたのよ。また来年もお願ひします。」と言ってとても喜んでくれます。

以前の柿の木は、ご近所のきらわれ者でした。だからこそ、その言葉を聞くと、あの時やっぱり切らないで良かったと思います。今では、ご近所さんの人気者になった我が家の柿の木。これからも、家族全員で力を合わせて柿の木の命を守っていきたいと思います。